

市史講座第 11 回ミニレポート

2 月 21 日(土)第 11 回の講座が開かれました。

第一部「松江城城郭施設の特色とその推移-記録・絵図史料を中心に-」(講師:米子工業高等専門学校名誉教授 和田嘉宥先生)



和田先生は、松江城内の施設の推移についてお話しされました。絵図・文献など松江城内の施設の変遷をたどる多くの史料を集め、年表風に紹介されました。この成果として、制作年代が不明であった「御城内絵図」(国文学史料館蔵)の年代が、享保期(1720 年頃)であることを指摘されました。これは絵図に記載されていた人物の職名について、その在任期間から割り出すという方法を取られています。さらに松江城の築城後も、江戸時代を通じて建造物の改修が行われていた事実を明らかにされました。

今回の報告は、松江城に関わる史料の収集と、各史料の分析の成果の一端を示すものといえます。

その作業として史料編纂室による文献整理の方法を紹介されました。その際に作成する「史料調査カード」によって「松江城関連年表」を編集することができ、着々と史料が集積されていることをお話しされました。

第二部「江戸時代の農村一ひと・いえ・くらしー」(講師:関西大学講師 常松隆嗣先生)

常松先生は関西のご出身ですが、ご自分のルーツが島根県にあり、帰省した際に身近にあった山や川や裏山に、近世の風景を感じたとお話しされました。松江市ではとにかく城や藩主がピックアップされがちですが、武士を支えたのは一般の農村であり、それなくしては藩がなりたちません。では実際に、農村に生きた人々はどのような生活を営んでいたのでしょうか。

常松先生はまず、近世の農村を知る基礎的史料として、村絵図・万差出帳(村明細帳)・宗旨証拠帳(宗門改帳)について説明されました。これらの史料から村の概要や人口、女性の出産年齢や老人の年齢(先生がご覧になった史料では最高齢が99歳!)という事などが分

かります。百姓には農作業に従事することが求められていましたが、凶作や不漁により困窮する村浦が出現し、農作業以外の仕事(瓦師など)に雇われる者も多くなりました。このように村の様子は変わっていくのですが、さらに一揆・村方騒動・国訴など領主と対峙する百姓も現れ、農村内でも入会(いりあい)地や藻場(もば)をめぐる隣村との争論が多発しました。このように政治的・経済的に成長した百姓＝「ものを言う」百姓が登場します。

最後に、江戸時代は「百姓の時代」であり、江戸時代に培われた様々な能力が日本の近代化に活かされたこと、また、こうした史料を保存活用することで地域の歴史が明らかになるので、是非史料を受け継いでください、とお話しになりました。

